

# 1844年～1846年のボードレール

## —ボードレール=デュファイヌ—

白 銀 敏 枝

(受付 1998年11月17日)

### I

文芸の分野のみならず、すべての分野において、偉大な業績を残した人物には、克明な伝記や、評伝が多く出版されるものであるが、なかでも、ボードレールの評伝は群を抜いて多いように思われる。多くの作家に関しては、ほとんどの場合、様々な伝記が書かれていても、アカデミックなもの、いわゆる決定版というべきものが存在するが、ボードレールの場合は、重要な伝記・評伝が数多くあるのみならず、依然として出版され続けている。最初の重要な評伝、E. Crépet の *Baudelaire* (1906) 以来、現在まで続いているのである。彼の人生そのものが、非常に深く作品と関わっているからである。一般的に、作家の代表的作品に関しては、どの作家にもその前後の人生が深く関わっているのも、研究者としても見逃せないのは当然である。しかしながら、ボードレールの場合ほど、日々の行動と、作品が直接全人生にわたって結びついていることは非常にめずらしい。まるで日めくりカレンダー<sup>1)</sup>のような伝記も出版されているほどである。また、ダンディズムが時代精神の特徴の一つであった時期に生きたボードレールは、当然のごとくダンディーを気取っていたが、その彼の風采が、同時代人による書簡、記事を基に、年代をおって克明に死に至るまで記す資料も示されている<sup>2)</sup>。さらに、彼自身も『内面の日記』<sup>3)</sup>と称される日記とメモを残しており、多くの証拠を提供している。したがって、『悪の華』に収録されている詩篇のうちかなりの数のものが、客観的にその制作年が確認されているが、明確に判定できない詩篇もある。ボードレール美学を代表する重要な詩、『照応』(*Correspondances*, 『悪の華』IV) もその一つである。

*Micro-Histoire* によれば、1844年という年について次のように書かれている。

1844 — *La Fontaine de Jouvence*, tableau de William Haussoulier, est exposé à Londres,

1) *Charles Baudelaire une Micro-Histoire*, Raymond Poggenburg, 1987.

2) *Baudelaire devant ses contemporains*, Bibliothèque Baudelairienne I p. 17-28.

3) *Journaux intimes. Fusées*, (『火箭』), *Mon cœur mis à nu*, (『赤裸の心』), *Carnet* (『手帖』) を指す。(Josè Corti 版, 1949)

à la Royal Academy. Emile Deroy fait le portrait de B, en quelques séances à la Tour d'Argent, alors restaurant de marinière, et d'après ce portrait une lithographie. A ces séances, au nombre de quatre, assistent Arondel, Léon Fauré, Nadar et Songeon. Mascagna publie les Polkeuse, poème de "Nick Polkmar". On y trouve le nom de "Fanfarnou", origine probable de celui de l'héroïne de *La Fanfarlo*. …… (p. 60)

1844年、ウィリアム・オースリエの絵、『ジュヴァンスの泉』が、ロンドンのロイヤルアカデミーにおいて展示。エミール・ドゥロワがボードレールのポートレートを画く。当時、海鮮レストランであったトゥールダルジャンで何回か食事をしていた時のボードレールである。その席には全部で4人、アロンデル、レオン・フォレ、ナダールそしてソンジョンがいた。マスキャーナが、「ニック・ポルクマールの詩、『ポルカの踊り子たち』<sup>4)</sup>」を出版する。このなかに「ファンファルヌ」という名前がある。おそらく、『ラ・ファンファルロ』のヒロインの名前の原型と思われる。……

この引用のなかにボードレールと絵画を結びつける重要な名前を見ることができる。アロンデルとドゥロワである。1842年8月当時、アロンデルは、ボードレールも住むことになるピモダン館で古美術品を売っており、ボードレールはかなりの絵を彼から購入するだけではなく、1843年頃からは借金もしていたようである。また、ドゥロワとも、1842年から彼が死ぬる日まで、親しい交際があった。プラロンはクレペあての手紙<sup>5)</sup>のなかで、ボードレールの頻繁なルーヴル通いを述べているが、その多くの場合、ドゥロワと一緒にだったようである。ルーヴルであるいは街を散策しながら、ドゥロワは、ボードレールに色彩について語り、絵画の技法についても語って聞かせていたと、ピシヨワ＝ジグラーによる伝記<sup>6)</sup>は言っている。しかしピシヨワ自身は次のようにも言っている。

La récente étude de Jean Ziegler sur Deroy, avec qui Baudelaire est intimement lié de 1842 au dix mai 1846, date de la mort du peintre, peut expliquer cette apparente contradiction: Deroy, grand admirateur des coloristes, de Rubens, des Anglais et de Delacroix, oriente Baudelaire vers la couleur, tandis que celui-ci tient de Balzac la conviction que l'art doit être moderne. La synthèse s'opère difficilement, d'autant plus qu'une autre influence s'exerce sur le jeune critique, celle de Gautier. (Oeuvres complètes. II p. 1254)

ボードレールが、1842年から1846年5月10日、亡くなる日まで親密な関係にあったドゥロ

4) 当時、評判となっていたポルカのダンサー、ファンファルヌを詩っている。

5) E. Prarond. 1886年10月。

6) *Baudelaire*, Claude Pichois et Jean Ziegler, 1987, p. 203-204.

ワに関するジャン・ジグラーの最近の研究は、明らかに矛盾する次のような考え方を可能とする。すなわち、色彩家である、ルーベンス、英国派、そしてドラクロワの偉大な讃美者であるドゥロワがボードレールを色彩へと導いたという論である。一方、同時にボードレールは、バルザックから、芸術は現代的であるものという認識を得ていたが、これを統合することは、もう一つのこの若い批評家に及ぼした影響、つまり、ゴッテの影響があるだけにむつかしい。

この引用は、『1845年のサロン』と『1846年のサロン』と比較し、後者が前者と質的に大きく異なる点は、絵画の「現代性」を明確に理論づけている点であると主張する部分である。ボードレールが、ドラクロワの絵画を軸に、絵画論を展開するのは、単にドラクロワの秀れた色彩表現のためではなく、画法を超えたところ、すなわち「現代性」を形而上レベルで認識しているところである、と論じているなかでのドゥロワ評である。たしかに、美術批評家ボードレールが形成されるために「統合」された、さまざまな影響、殊にディドロ<sup>7)</sup>、スタンダール<sup>8)</sup>の関わりは大きい、『1845年のサロン』を書くに至った原動力となった、1842～1844年頃の情熱的な美術作品（彫刻を除く）への傾倒を支えていた一人としてのドゥロワの存在は意義があったと思われる。

もう一人の、この傾倒を奇妙にも支えたのが、アロンデルである。前出のプラロンの手紙や、アスリノー<sup>9)</sup>によれば、この時期（1842年～1846年）に多くの美術品や稀覯本を買い、そして売却していたが、アロンデルからかなり購入していたようである。最終的に払い切れなかった額は、14 500 フランにものぼり、支払をめぐって訴訟となり（1870年3月26日）、清算は母親によって、彼の死後大幅に減額されて、1872年になされた。

Baudelaire achetait alors, quelquefois, de vieux tableaux<sup>10)</sup>, s'en dégoutait, les vendait. Lorsque j'allais le voir au quai de Béthume, je le trouvais souvent sur un siège bas, examinant minutieusement une toile acquise la veille et posée devant lui, sur une sorte de chevalet. Pendant quelques temps il crut avoir découvert des Bassan.

(Baudelaire, études et témoignages p. 21)

ボードレールは当時、何度か古い絵画を購入し、飽きると売っていた。パチュューヌ通りの彼のところに行くと、低い椅子に坐りクッションのようなものの上に置いた、前日手に入れ

- 7) 拙論、『ディドロとボードレール(1), (2)』参照(『広島修大論集第37巻第2号, 第38巻第1号』)  
 8) 拙論、『“イタリア絵画史”における批評性』, (『広島修大論集』第39巻第1号)  
 9) Ch. Asselineau, J. Crépet の *Baudelaire et Asselineau* 参照  
 10) 原注, “A. Arondel, comme lui locataire du baron Pichon à l'hôtel Pimodan.” (「アロンデルより、彼と同様にピモダン館 ピシオン男爵の借家人。」)

たばかりの絵を、微に入り細に入り調べている彼をしばしば見たことがある。しばらくの間、彼はバッサンの絵を何枚か発見したと信じていたことがあった、

この訴訟における資料より、アロンデルがボードレールに、どのような絵をいくらで売ったか知ることができる<sup>11)</sup>。たとえば、16世紀末のズッカーリ (Zuccari) の『マドンナ』を1200フラン、プッサンの風景画を1000フラン、さらにベラスケス (Vélasquez) の頭部、タントーレ (Tintoret) の聖書を主題にしたもの、そしてコーレージュ (Corrège) を一括100フランで売っている。これら三点は、一つ平均33フランということになり、当時としても信じがたい低価である、当然真贋に大いに問題があることが考えられる。彼は、その後、一度も古美術を論じていないことと、真贋問題が関わっているか否かは、わからないが、サロン評をもって美術批評を始めていることから理解できるように、現代絵画の方に彼の審美眼は向けられたのであろう。しかし、このようにイタリア絵画をいきなり次から次へと手に入れようとしたエネルギーには、スタンダールの『イタリア絵画史』の影響があるように思われる。この時期、ボードレールはスタンダールの批評作品<sup>12)</sup>の熱心な読者であったに違いない。そしてアロンデルもある意味でスタンダール自身の絵画体験を、ボードレールが再体験することに協力したことになり、ピモダン館の住人であったことの効用<sup>13)</sup>の一つとなった。

## II

日常的なルーヴル通いと、精力的な絵画の購入という生活を送っており、ボードレールは、どっぷりと美術の世界に浸っていた。プラロンは、前出の手紙のなかでこのように言っている。

Deès ce temps (1842-1846), Baudelaire se préoccupait autant de peinture que de poésie.  
Je l'ai suivi quelque fois au Louvre, devant lequel il passait rarement sans entrer.

この時期 (1842~1846) より、ボードレールは、詩と同じくらい絵画に心を奪われていた。何度か私は、彼についてルーヴルに行った。彼は、めったにルーヴルの前を入らないで通り過ぎるということはなかった。

詩と絵画に、「同じくらい」に彼の精神が集中されていたというのは、素朴な表現でありなが

11) 注6) 参照 p. 201.

12) *Racine et Shaksepear* (1823-1825), *Salon de 1824* (1824).

13) 拙論、『ドラクロワとボードレール』(広島修大論集第37巻第1号) 参照。住人の一人、画家 Boissard のアトリエで多くの芸術家と知遇を得る。

ら深い意味をもっている。なぜなら、詩と絵画は、ボードレールのなかにあっては、同一の美であったからである。それぞれのジャンルとして同じくらい受け入れる能力があるという段階ではなく、まったく同一のミューズによって具現化されたものなのである。

Je crois sincèrement que la meilleure critique est celle qui est amusante et poétique; ...  
— un beau tableau étant la nature réfléchie par un artiste, — celle qui sera ce tableau réfléchi  
par un esprit intelligent et sensible. Ainsi le meilleur compte rendu d'un tableau pourra être  
un sonnet ou une élégie. (*Salon de 1846.*)<sup>14)</sup>

私は真摯に信じる、最良の批評とは面白く詩的なものである、……美しい一枚の絵は画家によって映し出された自然なのである。……——批評とは、知的で感受性をもった精神によって映し出された絵となるようなものである。したがって、一枚の絵の最良の解釈は一篇のソネットもしくはエレジーとなり得る。

もっとも、しばしば引用される部分の一つであるが、絵画と詩が同一のものとなるだけでなく、さらに批評も同一の美から生まれてくるものでなくてはならない。いわば、詩、絵画、批評は、それぞれ自然と知性と感性とによって創り出されるのみならず、それぞれが三位一体的に連携しているものと、ボードレールは言っているのである。事実、彼は、この『1846年のサロン』のなかの『ウージェヌ・ドラクロワ』において、彼の言う「批評」を実践することになる<sup>15)</sup>。

1845年と1846年にサロン評を出版物として発表し、若き美術批評としてデビューしたが、詩の方ではどうであったか、『1845年のサロン』1845年5月9日から15日の間に出版されたが、その直後の5月25日に、*L'Artiste* (『芸術家』) 誌上において初めて、『悪の華』収録の詩篇が発表された。それは1841年、ボードレールがインド洋になかば強制的な処置として旅行するはめになったが、その際に創った、*A Une Créole* (『ある植民地生まれの夫人に』) という詩であった。偶然にも、同じ年の同じ月に、批評と詩(すなわち『悪の華』)において正式なデビューが行われたことになり、このことはその後の死に至るまでの20年余りのボードレールの詩人としての生活を象徴しているように思われる。

「1846年になってはじめてボードレールを知った」<sup>16)</sup> というプラロンは、「1843年にすでにボードレールによって創られていた詩篇のいくつかを思い出せる」<sup>17)</sup> と言う。E・クレペの間

14) *Oeuvres complètes*, II, p. 418.

15) 拙論『ボードレールの美術評論作品における語彙について』フランス文学13号参照。

16) *Baudelaire, études et témoignages*. p. 13.

17) 同上, p. 24.

に答えるものとしてこう続ける。

Baudelaire avait déjà écrit, en ce que j'en puis savoir et deviner, un grand nombre de ses vers, et proportionnellement à la durée de sa vie, beaucoup plus qu'il n'en écrivit depuis.

Voici, et sans nul doute, les titres de pièces dites par lui vers ce temps, entendues par nous, par moi:

*L'Albatros, ... Don Juun aux enfers La Géante, ... «Je t'adore à l'égal de la voute nocturne», ... Une charogne, ... «Une nuit que j'étais près d'une affreuse juive», ... A une Malbaraise, Le Rebelle, Les yeux de mon enfant<sup>18)</sup>, ... «je n'ai pas oublié, voisine de la ville» ... «La servante au grand cœur ... » «La diane chantait dans la cour des casernes ... »<sup>19)</sup> ... L'Ame du vin, Le Vin du chiffonnier, Le Vin de l'assassin, Allégorie ...*

Je suis certain que toutes ces pièces étaient composées avant la fin de 1843.

Je suis beaucoup moins sûr pour celles qui suivent, mais Baudelaire a souvent refondu beaucoup.

Ainsi j'hésite à me rappeler la pièce *Bénédiction* — «*J'aime le souvenir de ces époques nues*»: Je crois avoir entendu, c'est-à-dire reconnaître un ou deux vers de cette pièce.

(p. 24–25)

私を知り、察することができる限りにおいて、ボードレールは、すでに彼の詩句の多くを書きおき、彼の人生の長さから比例して考えてみると、その後には作られたものよりはるかに多くのものが書かれていた。

以下に挙げるものが、まちがいをなく彼が語り、我々が、私が聞いた作品の表題です。『あほう鳥』……、『地獄のドンジュアン』、『女臣人』、『夜の天空のごとくに私は君を讃める』、……『腐肉』……、『私がおぞましいユダヤ女のそばに横たわった夜に』……『マラバル生まれの女に』、『反逆者』、『わが子の眼』、『忘れてはいない、街の近くの……』、『あなたがお嫉みだった、高潔な心のあの女中……』……『起床ラッパは兵營の庭に鳴り響き……』……『葡萄酒の魂』、『屑屋たちの葡萄酒』、『殺人者の葡萄酒』、『寓意』……

これらの作品が1843年末までに作られたことは確かです。

以下に続けるものに関しては、はるかに不確かですが、ボードレールはしばしば作り変えておりましたから。

したがって、『祝祷』を思い出すとは言いかねます。[……あの裸の時代の思い出を私は愛する……] は、聞いたことがあるように思います。つまりこの詩の1～2行は聞き覚えがあります。

18) 原注, “C'est à dire *les Yeux de Berthe*” [『ベルトの眼』である。]

19) 原注, *Le Crépuscule du Soir* [『夕べの薄明』]。

この引用の後、かすかに記憶にあるような気もするが定かではないという標題がいくつか続いているが、少なくとも、これら16篇だけは確実である、そして、アスリノーも同様のことを言っているから<sup>20)</sup>、プラロンの「1843年以前に多くが作られていた」と言っていることは、信頼できるものであろう。

この年（1845年）の10月、ボードレールの友人の一人、ピエール・デュポン<sup>21)</sup>の詩集、*L'Agicotage*（『投機売買』）の裏表紙に、「Pour paraître incessamment: *Les Lesbienues*, par Baudelaire-Dufaïs»（「近刊予定—ボードレール＝デュファイス著、『レスボス島の女たち』という広告が出る。《*Lesbienues*》は、《*Limbes*》（『冥府』）を経て、*Les Fleurs du Mal*（『悪の華』）となる。この経緯についても多くが述べられているが、いずれにしろ初めて自分の詩集に標題をつけ公表したのが1845年である。この標題は翌年1846年にも、テオドール・バンヴィル<sup>22)</sup>の詩集 *Les Stalactites*（『鍾乳石』）そして、ボードレール自身の『1846年のサロン』の裏表紙に同様の広告が出る。プラロンの証言で明らかにされているように、『悪の華』詩篇の多くが、この時期までに創作されていただけでなく、そのうちの一篇が前出のように初めて発表された年に、すでに総題としての標題をすでに考案していたことになる。さらにそれぞれの詩が有機的にまた自動的に作用し合う、総合的に一つのオリジナルな世界を創り出したいというボードレールの意図の存在があることが理解できる。標題の変移、『レスボス島の女たち』、『冥府』、『悪の華』から考えられることは、単純に解釈しても、ボードレールが、人間が内にもつ奥深い世界、内面の暗い部分を、詩集全体の構成の効果によって表現しようとしていたことが伺える。

#### IV

1842年2月15日に、ポルドーに上陸するとすぐにパリにもどったボードレールは、ほどなく6月よりサン・ルイ島のベテューヌ河岸10番地<sup>23)</sup>に住む。さらに翌年秋には、アンジュー河岸17番地のピモダン館<sup>24)</sup>に住む。歴史的に価値のある建物で、ここに住むことはいささか貴族趣味と思われていたような館であった。ここには、1845年6月30日の自殺未遂事件のしばらく後まで滞在する。おそらく経済的な理由で住めなくなったようである。インド旅行帰国直後からこのピモダン館の住人であった時期における、ボードレールの交遊関係をみると、その“質”の高さに驚かされる。たとえば、ドラクロワやゴーチェと直接面識を得られるよ

20) 注9) 参照。

21) Pierre Dupont.

22) Théodole Banville.

23) Quai de Béthume. ただし、現在は22番地。

24) Hôtel Pimoden (Hôtel Lausan), quai d'Aujou.

うになったのは、ピモダン館での交遊がきっかけであった。ナダール<sup>25)</sup>や前出のドウロワ、シャンフルーリー、ピエール・デュポン、アスリノーといった、知的にも芸術的にも秀れているだけではなく、新しい、ボードレールのいう「現代性」感覚にあふれる友人たちと、深く、時間のほとんどを費やして親しくつき合う<sup>26)</sup>なかで彼の知的形成がほとんど極みにまで達したのであった。また、彼にとって知的形成と同じくらい重要である強烈なイスペレーションを与える彼のミューズと言える存在と出合い、親密な関係をもったのも、ベチューヌ河岸に住み始めた頃とされている。黒人と白人の両方の血を引く、ジャンヌ・デュバルが、その女性である。彼女はコービー色の肌をした「黒いヴェニウス」と称され、『悪の華』のなかで、傑作と言われるジャンヌ・デュバル詩篇を詩人に生み出させた、女神、ミューズであった<sup>27)</sup>。

最後に、この時期（1844—1846）のボードレールにとって重要なこととしてつけ加えるべきことは、彼の経済状況である。最初に述べた、ボードレールの美術への傾向とともに始まった美術品、稀覯本その他趣味全般に及ぶ収集、そしてピモダン館での生活、また先に述べた交遊関係を支えたのも、彼が法律的成人になったと同時に彼の自由になった父親の遺産であった。満21歳を過ぎた頃、母親と義父から父親の遺産の相続として、彼の手元に渡された総額は、10万フラン近いものであった（不動産も含む）。しかし、一年足らずの、1843年の6月には、その20%である2万フランが引き出されていた。まさしく濫費であった。1844年8月より法的手段に訴え、彼の家族は、父親の遺産を護ることになり、彼は、アンセルという法的後見人を通して、月々わずかな支給を受ける身となった。莫大な浪費によって可能であった、彼の精神的にも物質的にも豊かで自由な生活は維持できなくなり、金銭による苦しみと家族との確執がよりいっそう厳しいものとなっていた。

このようにボードレールにとって、『悪の華』の詩人として（同時に美術批評家ボードレール）、完成せしめるためにもっとも重要な部分が、すべて1844年から1846年間に、究極的と言える段階で集中しているのである。象徴となる時期と言ってよからう。

この時期が、彼自身とその後の彼の人生を象徴していると言っても過言ではない、文字どおりの“象徴”が存在している。彼が用いた筆名、Baudelaire-Dufaÿs（ボードレール＝デュフェイス）である。これには、いくつかのヴァリエーションがあるが<sup>28)</sup>、『1845年のサロン』、『1846年のサロン』、前出の詩集 *Lesbiennes* の広告もすべてこの筆名のもとに発表している。ピショワ＝ジグラーは、Baudelaire<sup>29)</sup>のなかで *Monsieur Baudelaire-Dufaÿs, 1844—1846*

25) 写真家 Nadar.

26) プラロンは、『1845年のサロン』が出版された時、自分も含めみんな驚いたと言っている。なぜなら、机に向ってじっと仕事する姿など見たことがなかったからである。

27) 他にマリー・ドーブラン、サバチエ夫人、ユダヤ人少女もミューズとされている。

28) Baudelaire-Dufaÿs, Baudelaire-Faÿs, Baudelaire-Dufaÿs 等々。

29) 注6) 参照。



(XII章, p. 199–p. 232) という章を設けている。Dufajys という名前は、ボードレールの母親の結婚前の姓である。なぜ父親から受け継いでいる正当な名前に母方の姓を組み合わせて使ったのだろうか。ピショワもいくつかの説明を挙げているが、決定的な説明はつかないようである。義父との確執ではないことは想像できる。彼と同じ姓をもつことは強要されてはいないのであるから。あるいは、母親の愛着を意味しているかも知れないという。また、単なる貴族的な感じのする名前あるいは、プレイヤー派の詩人 (Du Bellay) を想起させるようにと単純な好みからの筆名ではないかとも言っている<sup>30)</sup>。ともかく1847年のなかばまでこの名を用いたようである。したがってこの密度の濃い3年間に用いていたことに、理由はともかく、意義があるように思われる。この時期のボードレールの昂揚した気構えの表れのように思えるからである。

ドラクロワ論を軸に展開した彼の美術批評作品も『悪の華』の概念もすべてこの時期に収斂しているのではなかろうか。それぞれドラクロワ論においても、『悪の華』においても重要な意味をもつ詩篇、*Les Phares* (『燈台』F. M. VI)<sup>31)</sup>と *Les Correspondances* (『照応』F. M. IV) の制作年代には諸説があるが<sup>32)</sup>、やはりこの時期に源流があることは確かであると思われる。ピショワは、この時期は、ボードレールにとって、青年期の終わり («*La fin de la jeunesse*»)<sup>33)</sup>を同時に意味しているという。先にも述べたが、ボードレールはボードレールとしてこの時期に形成されそして完成されたのであるから当然であろう。

## テ キ ス ト

- Les Fleurs du Mal*. José Corti, 1968 (クレベ, ブランによる批評判)  
*Les Fleurs du Mal*. Garnier, 1961 (ガルニエ版)  
*Baudelaire, Œuvres Complètes*, Gallimard (プレイヤー版)  
*Œuvres Complètes de Charles Baudelaire*. (コナル版)  
*Baudelaire, Correspondances*, Gallimard (プレイヤー版)  
*Delacroix, Journaux intimes*. Plon, 1932  
*Diderot, Œuvres Esthétiques*. Garnier (クラシックガルニエ版)  
*Diderot, Œuvres*. Gallimard (プレイヤー版)  
*Diderot, Salons I–IV*. Hermann (Collection Savoir)  
*Œuvres Complètes*, Cercle Bibliophile, 1969.  
*Histoire de la peinture en Italie*, Gallimard, 1996.  
*Correspondances générales I*, Honoré champion, 1997

30) 注6) 参照, p. 199–200.

31) ドラクロワ部分の4行は『1846年のサロン』において同質の論説がある。

32) A. Adam は1844年説を取っていたが後年撤回。

33) 注6) 参照, p. 229.

参考文献

- Amiot, Anne-Marie. *Baudelaire et l'illuminisme*. Nizet, 1982
- Basaim, Tamara. *La femme dans l'œuvre de Baudelaire*. Baconnière, 1974
- Blin, Georges. *Baudelaire*. Gallimard, 1939
- Blin, Georges. *Le Sadisme de Baudelaire*. José Corti, 1948
- Bopp, Léon. *Psychologie des Fleurs du Mal (I-V)*. Droz, 1969
- Brunot, Ferdinand. *Histoire De La Langue Française*. Armand Colin, 1966
- Bush, W. *Regards sur Baudelaire*. Minard, 1974
- Cassagne, Albert. *Versification et Métrique de Ch. Baudelaire*. Hachette, 1906
- Castex, P. G. *Baudelaire critique d'art, Etude et Album*. CEDES, 1969
- Cellier, Léon. *Baudelaire et Hugo*. José Corti, 1970
- Chouillet, Jacques. *La Formation des Idées esthétiques de Diderot*. Armand Colin, 1973
- Crépet, Eugène. *Charles Baudelaire*. Slatkin, 1980
- Crépet, Jacques. *Baudelaire at Asselineau*. Mercure de France, 1953
- Ferran, André. *L'Esthétique de Baudelaire*. Hachette, 1993
- Galand, René. *Baudelaire, Poétique et Poésie*. Nizet, 1969
- Hubert, J. J. *L'Esthétique des Fleurs du Mal*. Pierre Cailler, 1953
- Huyghe, René. *Delacroix*. Hachette, 1964
- Jouve, Pierre Jean. *Tombeau de Baudelaire*. Seuil, 1958
- Kadi, Simone. *Proust et Baudelaire*. La Pensée universelle, 1975
- Kelly, David. *Baudelaire: Salon de 1846*. Clareudon Press, 1975
- Kempf, Roger. *Dandies, Baudelaire et Cie*. Seuil, 1977
- Laforgue, René. *L'Echec de Baudelaire*. éd Mont Blanc, 1964
- Lanson, Gustave. *L'Histoire De La Littérature Française*. Hachette, 1951
- Margherita Leoni. *Stendhal, La Peinture à l'œuvre*, 1996.
- V. Del Litto. *La vie intellectuelle de Stendhal*, 1962
- May, Gita. *Diderot et Baudelaire*. Droz, 1957
- Moss, Armand. *Baudelaire et Delacroix*. Nizet, 1973
- Pia, Pascal. *Baudelaire, par lui-même*. Seuil, 1954
- Pichois, Claude. *Baudelaire, études et témoignages*. Baconnière, 1967
- Pichois, Claude et Ziegler, Jean. *Baudelaire*. Julliard, 1987
- Pichois, Claude et Baudy, W. T. *Baudelaire devant ses contemporains*. Klincksieck, 1995
- Poggenburg, Raymond. *Charles Baudelaire une Micro-Histoire*. José Corti, 1987
- Pommier, Jean. *Dans les chemins de Baudelaire*. José Corti, 1945
- Pommier, Jean. *Le mystique de Baudelaire*. Société ls belles Lettres, 1941
- Poulet, georges. *Les Métamorphoses du cercle*. Plon, 1961
- Prévost, Jean. *Baudelaire*. Mercure de France, 1953
- Richard, Jean-Pierre. *Poésie et Profondeur*. Seuil, 1955
- Ruff, Marcel. A. *Baudelaire, l'Homme et l'œuvre*. Hatier-Boivin, 1957
- Ruff, Marcel. A. *L'Esprit du mal et l'esthétique baudelairienne*. Slatkin, 1972
- Sartre, Jean-Paul. *Baudelaire*. Gallimard, 1947
- Starkie, Enid. *Baudelaire*. New Direction, 1957
- Starobinski, Jean. *Diderot dans l'espace des peintures*. 1991
- Trahard, Pierre. *Essai critique sur Baudelaire*. Mercure de France, 1963
- Vivier, Robert. *L'Originalité de Baudelaire*. Palais des Académies, 1965
- Vouga, Daniel. *Baudelaire et Joséphe de Maistre*. José Corti, 1957
- Bulletin Baudelairien*, publié par le Centre d'études baudelairiennes, Université Vanderbilt, depuis, 1971
- Etudes bandelairiennes*. I. II. III. IV. V. VI. VII. VIII. IX. X. XI. Baconnière.

- 『ボードレール全集』福永武彦編（全四巻），人文書院，1963-64  
『ボードレール全集』阿部良雄訳（全六巻），筑摩書房，1983-1993  
『スタンダール全集』桑原武夫編（全12巻）  
『悪の華』鈴木信太訳，筑摩書房（世界文学大系）  
阿部良雄『悪魔と反復——ボードレール試解』牧神社，1975  
阿部良雄『群集の中の芸術家——ボードレールと十九世紀フランス絵画』中央公論社，1975  
阿部良雄『絵画で偉大であった時代』小沢書店，1980  
阿部良雄『ひとでなしの詩学』小沢書店，1980  
阿部良雄『ボードレールの世界』青土社，1976  
河盛好蔵『パリの憂鬱——ボードレールとその時代』河出書房新社，1978  
齊藤磯雄『ボオドレエル研究』三笠書房，1950  
佐藤正彰『ボードレール雑活』筑摩書房，1974  
サルトル，ジャン＝ポール『ボードレール』佐藤朔訳，人文書院，1956  
ビュートル，ミッシェル『ボードレール』高島正明訳，竹内書房，1970  
ブラン，ジョルジュ『ボードレールのサディズム』及川馥訳，牧神社，1973  
ブラン，ジョルジュ『ボードレール』阿部良雄，及川馥訳，牧神社，1977  
ベンヤミン，ヴァルター『ボードレール』川村二郎，円子修平訳，昌文社，1970  
ボルシェ，フランソワ『ボードレールの生涯』小島俊明訳，二見書房，1975  
横張 誠『侵犯と手袋——「悪の華」裁判』朝日新聞社，1983  
バット，クルト『ドラクロワの芸術』佃堅輔訳，岩崎美術社，1984  
ヴェントゥーリ，リオネロ『美術批評史』辻茂訳，みすず書房，1963  
スタロバンスキー，ジャン『絵画を見るデイドロ』小西嘉幸訳，法政大学出版局，1995  
『デイドロ著作集』小場瀬卓三，平岡昇監修，法政大学出版局，1980  
ランソン，テュフロ『フランス文学史』中央公論社，1973